

夫と苦楽を共に就農25年 管理面積が増え、新たな対応を模索中



畔草マルチで育った白菜



切わらで覆われた玉ねぎとニンニク



↑ 放牧中の牛の親子 → 田んぼ仕事を終え引越しするアイガモ



やなぎやれいこ

岩手県出身。1994年秋、夫婦2人で東和町へ引越。翌春より田んぼ6反歩を借りて営農開始。

水稲：1町歩。野菜、小麦、豆類：1町歩。豚：2頭、採卵鶏：約80羽、繁殖和牛：2頭。その他、放牧地、耕作放棄田、原野山林など5町歩ほど。

〒028-0121 岩手県花巻市東和町小友2-100

TEL・FAX 0198-44-3007

e-mail

warasibetowa@yahoo.co.jp

なぜ有機農業アドバイザーは男性ばかり？

有機農業アドバイザーは、夫・入江敦ですが、夫婦2人で営農していますので、私が原稿を書きます。

はじめに質問。どうして有機農業アドバイザーは男性ばかり？ 女性でアドバイザーになっているのは、夫を亡くした長野県・織座農園の窪川典子さんただ一人。有機農業をやっているのは、男性ばかりだったのか……？ 就農して25年。夫と苦楽を共にし、共に働いてきました。「奥さん」として「主人」を支えてきたと思われているとしたら、非常に不愉快です。私たちは、2人で話し合い、ぶつかり、立ち止まり、一緒に考え、暮らし、農業を営んできました。農業者として登録しているのは、入江。農地を借りているのも、所有しているのも入江ですが、それは制度上のことです。

私たちは、事実婚を選択しています。それは、私が夫の付属になることがないためです。私が、私として認識されるためであり、「奥さん」と呼ばれることを避けたいからでもあります。これによる不利益をこうむるのは圧倒的に私なので、夫の配慮が足りないと思うこともあります。そのたび夫に伝え、改善を求めています。法律的な保証がないこともあり、財産についても今後の暮らしについても、夫婦間で、そして子どもたちともよく話し合っています。

こんなにガードを固めているつもりでも、私が農業者として社会的に認められない悔しさや不快感を時どき味わいます。わが家に宿泊した人からのお礼の手紙の宛名は夫の名前のみ。対応したのが私でも、宛名はいつも夫だけ……。私は「見えないもの」あるいは「影」と認識されている気分です。このようなことを気にする私はおかしいのでしょうか？ 農婦のみなさん、いかがですか？

ジェンダーの問題は、農村では大きく、根深い問題です。日有研でも考えていきませんか？

環境負荷を減らす農業を模索しながら

さて、私たちが農業を志したのはバブルの時期で、お金さえあれば、何でも手に入ると思うような時代、海外から搾取をして豊かになっている時でした。札束で頬をひっぱたいて物を奪ってくる上に、汚いもの、危険な仕事を第三世界に押し付けている時代。他人を踏んづけているのに、「痛いからその足をどけて」という声を聞こうともしない、そんな社会に見えました。

そんな社会の中で生きたくない。せめて自分の食べるものくらいは自分で作り、できるだけ搾取しないで暮らしたい、せめて搾取される側の思いを想像できる暮らしをしたい。そういう思いもあって農業を始めました。もちろん、単純に「おいしいものを育てて食べたい」という思いがあったからではありません。

農業を始めると、いかに多くの機械が必要か、多くのプラスチックやビニールを使うかを知りました。搾取をしないで暮らすということ、環境を汚さないで暮らすということが、どれだけ大変なことかを知りました。今も、その矛盾の中で悩みながらやっています。

田んぼから始めたので、あつという間に両手で数えられないほどの機械を持つことになりました。雪の中でも野菜を育てるためには、ビニールも必要です。

「ポリマルチだけは使わない」と決めています。稲わらや畔草で畑を覆い抑草していくのは、時間と根気のいる作業ではありますが、きれいにマルチされたばかりの畑では、作物が伸び伸びとその葉を広げ、ほれほれとして、何度も見入ってしまいます。

行き場のない野菜はお肉や卵に変える

農産物はすべて提携で、ほとんど直接お届けしています。毎回通信を入れていますが、田畑の様子だけでなく、一緒に考えたい問題も載せて

います。「私、社会問題は気にならないのよね」と言っていた方から、「最近そういう情報、書いてないね、どうしたの？」などとと言われるようになりました。

岩手の田舎なので、周りは田んぼがたくさん。家庭菜園も多く、わが家の野菜やお米とバッテリーングすることもよくあります。収穫しても行き場のない野菜をどうするかに悩みました。もつと売り先を開拓するか、加工品を作っていくのか……？ そこで考えたのは、その野菜を動物に食べさせて、卵やお肉に変えることです。

はじめは鶏だけでしたが、豚を飼うようになってから、畑でいくらキャベツが割れても悔しくない（あ、やっぱり少し悔しいけど）。でもキャベツをたっぷり食べた豚肉のおいしいことを思うと、私はそのためにキャベツを作ったのだと思えばいいのです。田んぼの畦草刈りも田の中のヒエ抜きも、牛が食べると思えば、ペットの楽しい作業です。イベントよりも、毎日の地道な積み重ねを大切にしたいと考えています。たくさんの人を集めることよりも、一人ひとりとしっかりお付き合いをすることを大切にしようと考えています。

気持ちよく手伝ってくだくことを考えつつ

高齢化によって耕作者がいなくなり、私たちの管理面積がぐっと増えています。2人では手に負えないほどです。いよいよ手伝ってくださる人が必要だと感じています。仕事をしてもらうことに対して、きちんとお支払いをすることで、手伝ってくれる人に気持ちよくこの仕事を続けてもらえるように、という模索を始めます。

お金がないとやっていけない資本主義の世の中ですが、その資本主義に飲み込まれず、本当の富を分かち合うことっていったいどういうことだろう……？ 「誰かの支出はほかのだれかの収入」。私の支出が誰かを支えていく、そのこともそろそろ考えつつ、模索しつつ大地の上で汗したいと思っています。